

# オーム社開発部が T<sub>E</sub>Xを使う3つの理由

おもな

## 1. 原稿をバージョン管理したい

T<sub>E</sub>Xなら、校了まで原稿をテキストファイルで持てる

## 2. 制作の早い時点から最終的な見た目を意識したい

T<sub>E</sub>Xなら、仮スタイルをあてたPDFを自動生成しながら執筆や編集ができる

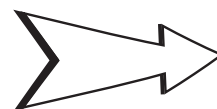
## 3. 組んで初めて得られる知見もフィードバックしたい

T<sub>E</sub>Xなら、組版後の大胆なスタイル変更にも耐えられる

「でも、出版社指定のT<sub>E</sub>Xスタイルで執筆するのはちょっと……」

## ご安心ください

オーム社開発部では、筆者独自のT<sub>E</sub>X原稿はもちろん、さまざまな形式（XML、HTML、Wiki、独自タグテキストなど）で書かれた原稿をそのまま使い、その原稿をバージョン管理しながら自動的にpL<sub>A</sub>T<sub>E</sub>Xを介してPDFを生成する仕組みを用意いたします。



詳細と連絡先は、隣の説明またはお配りした資料をご覧ください

# オーム社開発部における T<sub>E</sub>X の利用

森田尚・鹿野桂一郎・高尾智絵（オーム社 開発部）

hmorita@ohmsha.co.jp, kshikano@ohmsha.co.jp, ctakao@ohmsha.co.jp

<http://www.ohmsha.co.jp/>

2010-10-23

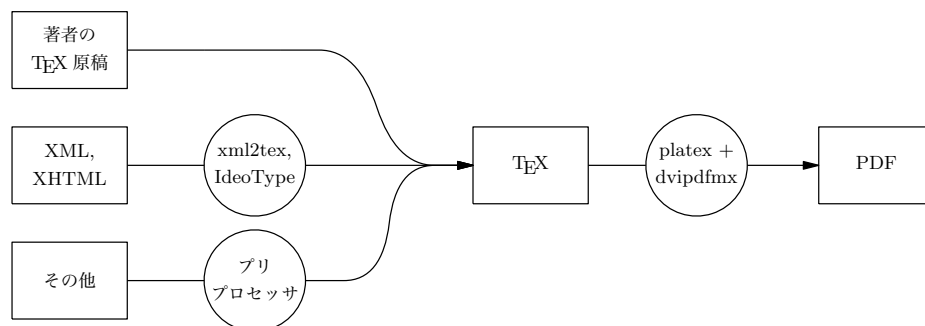
## 概要

当編集部で企画編集し、T<sub>E</sub>X (L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X) を利用して組版された出版物をご紹介します（展示物参照）。T<sub>E</sub>X 導入以前は、組み直しが大変なので、内容上・レイアウト上の試行錯誤が十分にできないという問題がありました。T<sub>E</sub>X を導入した結果、原稿が組版された状態で何度も書き直せるようになり、著者の実力を発揮してもらいやすくなりました。

## ワークフロー

現在では、執筆から編集制作までを次のようなワークフローで行っています。

1. 原稿一式をサーバ上のバージョン管理システムに登録しておく
2. 著者や関係者が、メーリングリストなどで議論をしつつ、原稿を編集する
3. 原稿が更新されるとサーバがそれを検知して、自動的に組版し、所定の場所に PDF をアップロードする (XML 形式や Wiki 記法で記述された原稿は、前処理スクリプトが T<sub>E</sub>X に変換する)
4. 著者陣は PDF をプレビューして原稿をさらに編集する (2 へ戻って繰り返す)



## 利用している主な技術

- pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X2e, DVIPDFMx, jsbook.cls (12.5Q オプションを追加)、その他マクロパッケージ多数
- xml2tex.scm, IdeoType (プリプロセッサ)
- その他: Subversion, Git, Darcs (バージョン管理)、Trac (プロジェクト管理)、Hudson (自動ビルド)、Debian GNU/Linux (開発・運用全般のプラットフォーム)、Adobe Acrobat (PDF/X-1a への変換)

制作基盤は過半がオープンソースソフトウェアで構成されています。開発者・メンテナの方々に感謝します。

## 今後

今後も引き続き、本文記述・スタイル定義・ビルド環境整備などさまざまな面で、T<sub>E</sub>X を利用する際のベストプラクティスを模索し、学んでいきたいと考えています。